

# ヴィルマンにおける 美的感覚と教育的努力について

武 安 宥

## 1. 感覚と美

感覚的印象は、強化された感情の添加物として、その内容に従って、知的衝動の最初の養分を形成する際に、自己の内部に美的感覚と芸術的関心を含む。この心的活動の領域は、「美的領域」と呼称され、したがってまたこの心的活動の感性の関係もまたそのように呼称されるのであるが、さらに我々が「味覚」に関して言及するとき、その際には味わうことが評価され、舌はその他にも美的な物に少なくとも関係しているのであるから、吟味された感覚として念頭に浮かんでくる。美的に心地よいとは大抵は耳目の感覚的対象物に通用する。つまり我々の「美」が「観る」ことに、あるいは別の言い方として「に見える」に由来するときには、それは目に見られうることに従って命名されることになるであろう。このことはまたスコラ哲学的定義において、**Pulchrum est, quod visu placet**（眼で見て好ましいので美しい）とあるように、眼で見られる物の場合には大抵、「形式」とは美的に好ましい物の問題である。それに対して色彩はその色彩の配置によって初めて美の要素となりうる。アリストテレスは美の三つの眼印として「形式」から借用して、秩序、均整、制限を挙げている<sup>(1)</sup>。均整はそれ自身は美的ではない印象を好ましくすることが出来る。即ち、我々にとって不規則なインクの染みは、嫌なものではあるが、同じ染みが均整が取れて反復される場合には、ある魅力等々をもつことになる。全ての反復・繰り返しと「模倣」は美的に主要な意味を有する。換言すると、

我々に良く知られた物の形姿を見ることを我々は好ましく思うが、これは我々に関わりのある物、ないしはこれとあれとは関わりのあるもの、と言ったり、また結論づけるからである<sup>(2)</sup>。模倣の雰囲気は芸術への衝動を自己の内に込めていて、「模倣は人間の自然本性に子どものときから備わっており、その模倣衝動によって人間はその他の動物と異なっている」<sup>(3)</sup>。

音調の領域においては「メロディー」「リズム」「ハーモニー」が美的に働き、この調和のとれた働きは転義の意味において全ての美を引き起こす要求である。成程、外的事象を模倣する音楽は些細な芸術作品かもしれないが、その課題は内的事象、気分、感情を表現し、ある意味で、その様に模倣することに他ならない。一層重要なことは、言葉の調べを用いた模倣が、言葉の調べが響きの彩色にある様に、言葉の形成の中にも現存している<sup>(4)</sup>。

この領域のそれぞれにおいて、美的要素の多面性は「統一」に結び付けられなければならない。古代ギリシア語 *καλός* (カロス・美) は、我々の「救済、幸福=Heil」、スラブ語、*cely* に由来する親戚の言語であり、根源的に意味するところは、統一的、完全、全くなどであり、*τέχνη* (テクネー・技術) 等々で、*τέκτων*, *τεκταίνειν* のような同一語族に所属しているが、「接続する」と名付けられ、それはラテン語の *ars* が、ギリシア語の *ἀραρίσκειν* と同類であるのと同様である<sup>(5)</sup>。しかし、美が単なる機械的結合と比べられるよりも、より一層適切な比較は「有機的結合」の場合である。会話 (*λόγος*・ロゴス) は頭と足 (始めと終わり) を持ち、関節 (中身) で繋がっているのが<sup>(6)</sup>、これは単に思想形式の法則にだけでなく、また美の法則にも一致している<sup>(7)</sup>。美が心魂に極めて活発に語りかける時とは、美が魂を吹き込まれた者とか魂に満ち溢れた者とかに印象を与える場合にほかならない。この意味で E. ガイベルは次のように言う。即ち「美しい形式は韻文を作らない、美しい思想もいまだ韻文に関係しない。言い換えると、大事なことは、身体と魂が良いときに結びつくときにほかならない」。芸術作品の魂とは根本気分であり、導きの思想、即ち「理念」、理念こそが思想を人生・生活に呼び込むのである。言い換えると、理念が内面から外面へと働きかけるのでなければならない。即

ち、ちょうどゲーテの格言はそのことを次のように言い表しているように。「何がいったい各人を喜ばせるのであろうか？ 開花を見ることであらうか、それはすでに内から良く形成されているのであり、外面的にどれほどピカピカしてようとも、彩色よく咲いていようとも、美はすでに前から存在している」と。天然の美を享受することは、天然においてそのように「前もって存在している」ことを予感することに基づいている<sup>(8)</sup>。

芸術美は、自然美の前兆であり、自然美を見出し、また周囲の現実から「取り上げる」ことを教える。「絵画、彫刻にとっては、なんらの空間的近隣は存在せず、前者においては、額縁が、後者においては台座が、周囲の環境を切り離している。言い換えると、建築物はその地平線上の基本線に在り、その基本線が眼前に見つけられないので必要な場合には、自分でその基本線を引く。また詩歌や音楽作品にとっては、現実生活との時間的区切りについての後・先 (prius と post) は存在しない。芸術作品は、鳥のごとくに低俗な現実から突出し、まさしくそのために、自然の現実的場面や産物もまた、それが現実との関連を失うや否や、芸術の対象としての性格を帯びてくる。景観がその近隣四辺から引き離されて、花、貝、結晶、否、動物の頭蓋骨でさえもが、言わば自己自身自ら完結体として、意味に満ち溢れた存在になってくるように、我々には思われ、談話から切り離され、しっかり固定された文章は、神託であるかのような響きをもってくる<sup>(9)</sup>。

## 2. 美の課題

色々の異なった素材への美的、芸術的感性の多様な活動は、その感性が発展し展開してゆく諸条件の単なる一つの活動にすぎないのであり、二つ目の活動は、その感性が「偉大で統一的課題」に奉仕することであり、趣味や芸術的技能を訓練する遊戯は、靈感に満ちた厳粛さで洗練されなければならないが、それは美が超人格的善として、また芸術的訓練が義務の実現として、品位あるものとされるがためである。知的衝動<sup>(10)</sup>における様に、美においてもまた「宗

教」が存在し、その宗教は創作に理想的目標を教示して、全体の領域が「統一」として設定される。文化的奉仕活動にあって初めて、声楽や演奏は音楽、すなわちミューズの神々の芸術、舞踏は舞踏法、歌謡は聖歌へと高められていく。演劇はギリシア人に始まり、キリスト教中世においては、ギリシア人に関係なく、文化的行為として生活に登場してくる。建築は発展して神性に品位ある場所を準備する課題に沿って建築術となり、建築様式は神殿や聖堂建築に明確な形態をとって現れてくる。すなわち形式や模写は聖域の装飾の奉仕として、造形芸術や絵画となった。宗教的要素が活動しない場合には技法は単に実際的要求に従った物に過ぎなく、中国やその他の国々に見られるような戯れにすぎない。

芸術がその品位と靈力を宗教によって支えられてきたことの想いが神話や伝説の中の神々や神々の息子達が芸術の最初の教師となっているそれらの神話や伝説の中で保護され続けてきている。その様にギリシア人たちは詩歌の根源をアポロンやミューズの神々へと遡源していった。すなわち最古の歌手はミューズの神々の息子達であった。つまりカリオペのオルフェウス、ウーラニアのリノス、クライオのヤーレモス等々である。造形芸術はアテネとヘーパイストスとの賜物として尊重された。すなわちヘーパイストスの孫、ダイダロスはアテネによって教育された<sup>(11)</sup>。音と建物との芸術はヘルメスの弟子でテーバイの建築者、アンピオンが結びつけた<sup>(12)</sup>。

詩歌と芸術が生まれ故郷の古代世界に汲み尽くされて終わっていたときに、キリスト教世界が詩歌と芸術に新しい飛躍を与えた。即ち、美と芸術の感性はもう一度宗教から自己の栄養分を吸い込んで、諸芸術は再度神への奉獻を、現代でもこのことを教会が行い、堅持しているが<sup>(13)</sup>、美的に形骸化する課題と一緒にあって当たっている。その際に、心術を導くものは心魂を通して芸術の名手に注がれる美的なものが心魂を超えて実在するあの美に由来する、ということである<sup>(14)</sup>。近代の芸術家は、芸術の「聖靈的要素」と「感性的要素」の結合を生の充実した統一のために次のように教示する。即ち、「すべての芸術には二つの極、現世と来世の故郷であり、この両脚を特別なものであると言ひ

得る。言い換えると、現世に芸術は根付き、来世に向かって高まっていき、来世において頂点に達する。換言すると、この精霊と精霊に一致する形式において、芸術は常に「生き生き」とあるようになるであろう<sup>(15)</sup>。

### 3. 思考と感覚の比較

詩歌と芸術は感覚的な物を、超感覚的な物、言い換えると、理想的な物を表現するために、克服しなければならない。その観点に詩歌と芸術の思想的認識との類似性が存在しており、「思考」の何倍もの着眼点が、美的感性の活動のためにも意義を有している。言い換えると、思考は感覚に奉げられているものではない。即ち、「思考は形態的能力として働く、それは詩人が詩作に際して思考するものをではなく、彼が以前から思考してきた物である」（グリルパルツェル<sup>(16)</sup>）。

特殊な物が表現可能であり、しかもそれが全く個別的方法を以ってしてのことではあるにしても、詩歌や芸術は「普遍的」要素として活動するので、アリストテレスは詩作活動を歴史よりも一層「哲学的」であると述べている<sup>(17)</sup>。全ての芸術作品は、現実と個別を欠かすことは出来ないにしても、依然として同時に「抽象的な物」であり、それはその抽象的な物で経験的所与の確実性が止揚されている、との意味においてである。造形作品は色彩、図形は自然の数量、両者は運動から抽象されている……演劇や小説は、一連の場面や出来事を我々に供するが、この一連の場面や出来事は、実際には多種多様な無慈悲な断絶においてのみ体験されるのであろう<sup>(18)</sup>。偉大な画家、アルブレヒト、デューラーの格言曰く、「芸術は本当に自然の中に潜んでいて、自然を抽出することのできる者が芸術家である」と。またベックリン（Böcklin）はこの自然の取り出しを心理学的に明瞭化している<sup>(19)</sup>。詩人や芸術家がそのように現象に働きかけ、抽出してゆく物が現象の「実体」であり、「根拠」、典型的なもの、永続的なもので、現象の中に「真実な物」を、偶然の中に「必然的な物」を探求する。それは丁度シラーが詩歌に関して適切にこの様に表現していることで

ある。即ち「詩歌の中にすべての真実な自然が存在しているはずである。それと言うのも、想像力は事物の自然がその想像力に定めている強制力以外の何らの強制力にも耐えられないし、またその他のいかなる掟にも従わないからである。つまり詩歌の中には何らの現実的歴史的なものもあってはならない。何故ならば全ての現実的なものは多少ともあの普遍的な自然本性の真実を制約するものであるから……。偶然を棄却した必然の純粋な表現の中にのみ偉大な様式は存在する」<sup>(20)</sup>。この偉大な様式は自己の指示を「必然の国」に拡大してゆき、また音調を定めたり景観を描く人たちにも拡大してゆく。それはこのような場合のことである。即ちこのような人々が音響の運動や外的現象の法則と、自分達の法則とを類推して、心の内的運動の法則を把握することができる時のことに他ならない。彼らはそのときに詩人や心魂の画家になることができる。同様の意味においてアリストテレスは詩歌の内的必然性を要請していた。即ちその必然性が我々を、そのような召命を享けた詩人や画家は、「彼等がそのように振舞いまたそのように語る人々である」<sup>(21)</sup>と確信させるはずである。それは自由が自らのうちに所有する必然性である。それと言うのも自由は内面性の後裔であるからに他ならない<sup>(22)</sup>。「我々が我々に所属する時には我々は美しい」、しかし「我々が何か異質な物を我々のうちに生来する時には美しくない」と、そのような意味でプロティノスは陳述する<sup>(23)</sup>。

#### 4. 自己を高尚化する理念の重要性

ところで現象に影響を及ぼす物は単に内面的なものだけでなく、また「高次なもの」、即ち「理念」もそうであり、この「理念」が美の表現者に現実の不足を正す能力を与えている。「芸術」とはプロティノスの表現に曰く、「眼に見える物を模倣するのではなく、自然の物が由来する思想にまで高まることである。換言すると、芸術とは本来の物の上に付け加えることであり、美の芸術が所有している物に不足分を芸術が補うことに他ならない。即ち、フィディアスはゼウスを彼が眼で見た物に従って創作したのではなく、むしろゼウスが如何

なる人物であるかを我々の眼前に明らかにするために、フィディアスが評価し、把握し、理解した物を創作したのである<sup>(24)</sup>。真実な芸術作品の真理は、真実と本質的なものが現実に存在している物の再現された物の中において、また同様に「主体的真理」ないし感じ受け止めた僅かな確証材料で、真に偉大な著作家を生む。——それぞれの芸術業績について妥当する。形式において客観と主観は一致しなければならない。即ち、偉大な著作家は問題を通して求められ、歴史的に制約される。また著作家に関しては、ビュソンの言葉も妥当する。即ち「様式とは人間である」。言い換えると、個人的＝人格的に感じ受け止められた物を表現することに他ならない。この意味において、詩人の課題は共通の財宝である物を独自に表現することである（*proprie communia dicere*）とホラティウスは呼称している<sup>(25)</sup>。

## 5. 芸術と倫理の関係

詩歌と芸術が真理の理念に奉仕する限りにおいて、真理の理念は「善」をも要請する。それと言うのも現実的な事物の価値もまた真理的な事物と本質的な事物の中に存在するからである<sup>(26)</sup>。古代人の格言は、「美は善に基づいて」<sup>(27)</sup>と指摘する。格言の言うところは善は高次の目標また美の標準尺度として形成され、感覚的快適さを超えて高まってゆくべきものである。「美は」シラーはいう、「感性の媒体を通して喜ばれるのであるが、そのことで美は善と相違しているが、美は理性の美的「形式」を通して喜ばれ、そのことによって美が快適な物と区別される、善は全く理性に何らの形式をも通さずに喜ばれる。言い換えると、善は考えられ、美は眺められ、快適な物は単に感じられるにすぎない」<sup>(28)</sup>。美は、これが感情の能力を活気づけることで、「生命」とは古代世界に由来する定義に曰く、「訓練を通して結合された表象に由来する全体の物であり、生命を促進する目的に向けられた物に他ならない」<sup>(29)</sup>。

道徳的に形成された美的活動は、「音楽」の場合には極めて早期に心理学的省察に訴えかけてくる。リズムやハーモニーに関してプラトンは、「それらは

心魂の内面に極めて深く迫り来て、そこにしっかりと定着し、高貴な姿形を与える」<sup>(30)</sup>と言う。またアリストテレスは音楽が道徳教育の純化のための不可欠な手段であると言う<sup>(31)</sup>。*κάθαρσις*（カタルシス・浄化）という究極的表現は、密儀の風習に由来し、恐れや恐怖や驚愕の様に、清められるべき人々の中に心情の動揺を呼び寄せることであり、それによって心情の動揺は浄化され、言わば死の恐怖の先取りによって死の恐怖から解放される<sup>(32)</sup>。そのように浄化された作用をアリストテレスは悲劇にも適用し、「悲劇は同情や恐怖を呼び起こし、心魂をそのような感情から浄化することである」<sup>(33)</sup>と言う。悲劇を観劇して、我々が空想で体験する物語は、具体的人間ではなく人間一般を表現するのであり、また類似的体験を我々にさせるような感銘や印象を和らげ静める。このような作用はまたその他の精神的作品にも生じる。即ち「偉大な作家や詩人においては」と、プラトン学徒のロンギノス（**Longinus**）は、「激情や欲情はその頂点において純化された心情に一致して解消されてゆく」と言う<sup>(34)</sup>。

## 6. 高次なるものへの努力としてのパイデア

人格における倫理的なものと美的なものとの融合を、ギリシア人達は、美と善（カロス カガトス）の態度（ハビトゥス）と称し、またそのための方法を教育（パイデア）に見出し、教育を内面的形態化として受け止め、そこでは多面的な知識や能力が高貴な心情と一致している。アリストテレスは教育を「幸福な日々の装飾、不幸な日々の避難所」と称し、また、我々が教育のお陰と感謝する人々を、両親以上に尊敬すべきであると警告している。なぜならば両親は我々に生命を、しかしそのような教育を与えた人々は品位ある生命を与えているからである<sup>(35)</sup>。さらに別の哲学者は「奉納品を備えた諸都市のように、私たちは教育の財宝で心魂を飾らなければならない」と陳述している<sup>(36)</sup>。ソクラテスは教育の財宝を祝日の雑踏に比べて、そこでは心魂が完全に観たり聴いたりしなければならぬとしている<sup>(37)</sup>。教養人の理想は、ある



考察によると、賢者の理想的な物への反省に他ならないということである<sup>(38)</sup>。もっとも、それは知的な物が美的な物に対して後退している場合は別である。即ち「教育的努力」はまず第一に内的形態化に向けられているので、詩歌や芸術にその栄養分を捜し求める。言い換えると知識や能力を通して、この教育的努力は自己の範囲を人生や生活の幅に拡大してゆき、普遍的で実際的な特徴を身に帯びて賢者に等しい者と思わせるように「教育された者」が教養人になる。叡智は教育や教養（*παιδεία*・パイデア）よりも古く、尊敬に値するものであるが、教養人が賢者の亜流である限りにおいては教養人は同時に賢者の複写的存在である。言い換えると才能に恵まれた者の特権は、同輩仲間の共通財宝であり、精神生活は高次から低次へと下降してゆく。格言に曰く「美的な物は善的な物を根拠にして」とは、特に教育に妥当する。教育によって形成された思想領域は、道徳的性格を足場にしなければならない。同じく格言はこのことを、「*vitae, non scholae discendum*, 即ち生活の中で実証しなければならない、学校が教育に与えた物は」<sup>(39)</sup>と述べているのである。

## 注

- (1) Arist., *Metaphy.* 13. 3 :
- (2) Arist., *Poet.* 4
- (3) Arist., *Poet.* 4
- (4) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, II, Band : Empirische Psychologie, 1903. §3. 3.
- (5) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, I, Band : Logik, 1901. §2. 2.
- (6) Ebd., §21. 1.
- (7) Ebd., §1. 3.
- (8) Vgl. ゲーテのこれに関する表現は「植物のメタモルフォーゼ」。Ebd. §19. 3.
- (9) Volkman, 『心理学読本』(*Lehrbuch der Psychologie*) II, §133, A. 4
- (10) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, II, Band : Empirische Psychologie, 1903. §21. 3.
- (11) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, II, Band : Empirische Psychologie, 1903. 547 ff
- (12) Hor. Od. 4. 11. 1 : *Hercuri nam te docilis magistor Movit Ducere quo vellet.*
- (13) Vgl. A. W. Schlegel の詩歌、教会と芸術の結び付：失われた姉妹たちよ、あなた

方を私の奉獻で神聖に致そう。そこで私はあなた方を天の勝利品へと導こう。等々。

- (14) S. August., *Confess.* 10. 34. 53. : Pulchra. . . quae super animas est.
- (15) ルードビッヒ・リヒター, 『古の芸術家の生涯の思い出』, 1890年, 増補版, S. 63.
- (16) Franz Grillparzer, 1791–1872, 劇作家
- (17) Arist, *Poet.*, 9.
- (18) Volkman, 心理学教科書, ここでは「abstrahieren」という言葉の使用が訂正されているのみである。即ち, 言葉は「捨て去る」という意味ではなく, むしろ「取り出し持ち上げる」という意味で用いられ, 正当な表現は次の様である。即ち「造形作品は形式等々を取り出している。抽出している。
- (19) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, II, Band : Empirische Psychologie, 1903. §15. 3
- (20) Über Matthissons Gedichte
- (21) Aristotle. *Poet.* 9
- (22) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, II, Band : Empirische Psychologie, 1903. §19. 3
- (23) Plotinus, *Enneades*, 8. 13.
- (24) Ib. 5. 8. 3.
- (25) *Ars Poet.* 128.
- (26) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, I, Band : Logik, 1901. §3. 6 : 20. 3.
- (27) その意味内容の詳細は Willmann, *Philosophische Propädeutik*, I, Band : Logik, 1901. §3. 6 ; 20.3.
- (28) 『様々な美的対象に関する多様な考察』 1793年。
- (29) Lucian., *Parasitus* 4 :
- (30) Platon, *Rep.* 3. 401 d
- (31) Arist, *Polit.* 8. 7.
- (32) Arist, *Frag.* 45.
- (33) Arist, *Poet.* 13.
- (34) Longinus, *De Sublimi.* 9.
- (35) Diog. Laert. *De vita phil.* 5. 19.
- (36) ギリシア語での言葉遊び
- (37) πανήγυρις ἐστὶ ψυχῆς ἢ παιδείας, πολλὰ γάρ ἐστιν ἐν αὐτῇ θεάματα καὶ ἀκούσματα.
- (38) Otto Willmann, *Philosophische Propädeutik*, II, Band : Empirische Psycholo-

gie, 1903. §21. 3.

(39) Seneca. *Epist.* 106

—文学部教授—